

PB-32.**MPO-ANCA 関連腎炎の生命予後に関与する因子の検討**

(腎臓科)

○外丸 良、松本 博、岡田 知也
長岡 由女、岩澤 秀明、竹口 文博
和田 憲和、中尾 俊之

【目的】MPO-ANCA 関連腎炎の予後を retrospective に検討した。

【方法】平成5年から平成14年までに当科においてMPO-ANCA 関連腎炎と診断された15例を対象に、死亡(D)群4例と生存(L)群11例に分け、予後に関する解析をおこなった。

【結果】観察期間はD群27.5±17.6ヶ月、L群27.2±31.9ヶ月と有意差はなかった。死因は呼吸不全3例、敗血症性ショック1例であった。D群とL群で、初診時血清クレアチニン濃度(6.2±2.2 vs 3.1±2.1 mg/dl; p=0.023)、維持透析導入(3/1 vs 2/9例; p=0.04)、肺病変(4/0 vs 2/9例; p=0.04)にそれぞれ有意差を認めた。しかし、両群間で年齢、ANCA値、CRP、白血球数、ステロイドパルス療法の有無、免疫抑制薬併用の有無については有意差は認めなかった。D群2/4例は細胞性半月体を伴わない高度の間質性腎炎の所見であった。

【総括】高度の腎機能障害・肺病変はMPO-ANCA 関連腎炎の予後不良因子と考えられた。

PB-33.**CAPD 患者の高インスリン血症に関する検討**

(八王子・腎臓科)

○吉川 憲子、中林 巖、明石 真和
吉田 雅治

【目的】CAPD 症例は高インスリン血症を来すと言われている。一方、高インスリン血症は動脈硬化の一要因と考えられている。CAPD 症例の空腹時インスリン値と、その臨床所見につき検討した。

【対象と方法】対象は非糖尿病性CAPD 症例20例。空腹時に2.5% 2Lの透析液を用いてPETを施行し、PET前と2時間後のインスリン値を測定した。空腹時インスリン値が12 μU/ml以上を示した9例を高インス

リン群(=HI群)、12 μU/ml未満の11例を正常インスリン群(NI群)とし、検討した。

【結果】血糖値は両群とも110 mg/dl以下で有意差を認めなかったが、血中インスリン値はPET前でHI群が高値を示し(HI群:NI群=16.4±8.8:6.4±2.6 μU/ml, P<0.01)で、2時間後にさらに上昇する傾向を示した(HI群:NI群=34.4±24.2:8.5±3.9 μU/m, P<0.01)。検査時のBMI(body mass index)はHI群25.9±1.3、NI群21.5±1.9で、HI群が有意に高かった。また検査時体重がCAPD導入時と比較して10%以上増加した症例がHI群では4例(50%)で、NI群2例(19%)より多かった。D/D0glucose(0.40±0.06:0.39±0.07)、CAPD処方より計算される1日のglucose吸収量(294±78:293±54.1 kcal)、年齢、CAPD施行期間、HbA1c、MBP、T-cho、TGには両群とも差は認めなかった。HI群9例中2例に冠動脈病変を認めたが、NI群では心血管系疾患を疑わせる症状を示した症例はなかった。

【結語】高インスリン血症は心血管病変の要因となる可能性があるが、CAPD全症例で認められるわけではない。高インスリン血症を予防するために、CAPD導入後も適正体重を維持する必要があると考えられ

PB-34.**Androgen 依存性器官の退化・再生におけるホルモン受容体ならびにTRPM/Clusterinの発現とmelatonin**

(解剖学第二)

○澤村 省逸、白間 一彦、山田 仁三

前立腺や精囊等の男性付属生殖器と共に骨格筋もAndrogen(A)依存性である。特にラットの肛門挙筋はAに対する反応性は高く、去勢により萎縮し、A投与により再生する。また、雌では欠くかあるいは痕跡程度であるが、出生直後のAndrogen投与で発達する。他方、主として松果体より分泌されるMelatonin(Mel)はリズムや抗生殖機能等種々の生理機能に関与することが知られている。今回の報告は、ラット肛門挙筋と前立腺を用いて、AとMel投与によるA受容体(AR)、Insulin-like growth factor-1受容体(IGF-1R)、Insulin受容体(IR)およびTRPM-2/Clusterinの発現を検索すると共に、両器官の両ホルモンに対する反応性を比較検討したものである。更に、肛門挙筋にお

ける TRPM-2/Clusterin の局在を免疫組織学的に観察した。

AR の発現は、肛門拳筋および前立腺共に去勢により低下し、A 投与により回復したが、その回復は Mel 投与により抑制された。細胞増殖能に関わる IGF-1R の発現は去勢により、両器官で高まり、A 投与により前立腺では顕著に減少したが、肛門拳筋では大きな変化は見られなかった。IR の発現も基本的には IGF-1R の場合と同様であった。遺伝的細胞死に関与する TRPM-2/Clusterin の発現は去勢により両器官共に上昇し、前立腺では A 投与により顕著に減少した。また、肛門拳筋における TRPM-2/Clusterin は筋原線維の Z-帯上に発現することを見出した。以上の結果より、同じ Androgen 依存性器官でも A に対する反応性はもとより、それに対する Mel の作用も異なることが示唆された。また、TRPM-2/Clusterin は前立腺では上皮に発現されることが知られているが、肛門拳筋では筋原線維の Z-帯に発現することが明らかとなった。

PB-35.

セメントレス全人工股関節置換術における大腿骨側の骨塩密度変化の検討

(八王子・整形外科)

○佐野 圭二、伊藤 康二、稲島 勇仁
上野 剛史、中島 一馬、木村 隆雄
高 明秀

【目的】セメントレス全人工股関節置換術 (THA) 後の骨反応を知る目的で大腿骨周囲の骨塩密度を dual energy X-ray absorptiometry (DEXA) にて経時的変化を計測し検討した。

【対象】症例は 23 例 24 股で、女性 21 例 22 股であった。手術時年齢は平均 61.7 歳であった。使用機種は Biomet 社製で大腿骨側は近位 1/4 ポーラス、カラーレスの Bimetric stem であった。術後経過観察期間は平均 4 年 4 ヶ月であった。

【方法】臨床成績は JOA score を使用し、骨密度は Gruen らに準じ stem 周囲を 7 zone に分け、術後 1 ヶ月、6 ヶ月、1 年、1 年 6 ヶ月、2 年、以後は年 1 回、経時的に測定した。術後 1 ヶ月の値を基準として、その比 (以下 BMD 比) を調べた。X 線学的には正面像にて loosening の有無、stem 周囲の変化を調べ、骨密度の変化と対比した。

【結果】Loosening をきたした症例はなく、JOA score は術前 51.7 点が術後最終観察時 91.0 点と改善していた。BMD 比は、どの zone も術後 6 ヶ月で低下し、zone 1 では術後 6 ヶ月時平均 91.6% だが、1 年で 98.2% に改善し以後 100% 前後で推移していた。その他 zone 2, 3, 4, 6 も 1 年で改善しその後は同じ程度で推移した。ただ zone 5 は術後 1 年から経年的に増加し術後 5 年で 122.1% であった。また zone 7 では 6 ヶ月で 83.9%、1 年で 90.2% でその後も低いまま推移した。zone 1, 2, 6, 7 の stress shielding は 3 股に認めたが内 2 股で同 zone すべて骨密度減少傾向がみられた。また骨皮質の肥厚は 2 股 (zone 5) に認めいずれも、同部の骨密度は上昇傾向にあった。

【まとめ】術後早期は大腿骨全体の骨萎縮をきたし、術後 1 年で骨密度の改善を認めた。近位 1/4 のポーラスのため stress shielding は少ない傾向にあったが、zone 7 はカラーレス stem でカルカーの萎縮のためか低下傾向にあり、経年的にも改善しなかった。Stem 先端内側の zone 5 では骨密度の経年的増加が認められ、2 股に骨皮質の肥厚がみられた。

PB-36.

重要臓器損傷を免れた頸部銃創の一例

(霞ヶ浦・整形外科)

○町田 英明、三神 貴、有沢 治
大瀬 陽一、藤森 元章、間中 昌和
市丸 勝二

わが国では銃所有に対して規制が厳しいため、欧米に比べて銃による外傷は少ない。しかし、近年の犯罪の欧米化と、低年齢化に伴い、銃による外傷は増加している。また、狩猟用の銃の所有も認められており、今後銃による外傷に遭遇する機会は増加すると考えられる。今回我々は、幸運にも重要臓器の損傷を免れた頸部銃創の一例を経験したので、報告する。

症例は 54 歳、男性、2003 年 1 月 〇〇 自宅付近の路上にて突然銃撃されて受傷。同日近医受診後、当院救急搬送となる。

初診時身体所見、身長 172 cm、体重 80 kg、意識清明、血圧 170/87、脈拍 86、左口角部に銃創をみとめ、後頸部は熱傷のためと思われる発赤を呈していた。また、銃弾の貫通による口腔内挫創をみとめた。単純 XP、頸部 CT scan にては頸椎後方筋層内に残存する